

広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	イタリア語における冠詞研究(5) : 作家名を中心として
Author(s)	古浦, 敏生
Citation	ニダバ , 8 : 15 - 22
Issue Date	1979-03-31
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00044719
Right	
Relation	



イタリア語における冠詞研究(5)

—— 作家名を中心として ——

古 浦 敏 生

§ 1 問題提起——本稿の目的

Palazzi, F. 「最新イタリア語文法」(注1)の「冠詞の省略」の項に, “dinanzi ai cognomi, eccetto che si tratti di persone celebri: es. il Carducci, il Foscolo; ma se si tratta di cognomi di persone molto popolari, l'articolo si omette: Garibaldi, Cavour, Colombo.” 「姓の前では無冠詞となる。但し, 有名な人の姓は別である。例えば, カルドゥッチ, フォスコロ(いずれもイタリアの作家)。けれども, 非常に有名な人の姓は無冠詞となる。例えば, ガリバルディ(将軍), カヴール(政治家), コロンブス(探検家)」とある。また, Piazza, E. 「イタリア語文法」(注2)には, “Il nome di famiglia (cognome) nell'uso letterario vuole generalmente l'articolo: familiarmente però, o di persone che han grande popolarità, può, pei nomi maschili, farne senza. Es. il Petrarca, l'Ariosto, il Bembo, il Della Casa, il Parini; Parini, Foscolo, Mazzini, Garibaldi, Cavour; ecc.” 「文語では一般に姓は定冠詞を伴う。例えば, ペトラルカ, アリオスト, ベンボ, デッラ・カーザ, パリーニ(いずれもイタリアの作家)。但し, 親密な用法において, または, 非常に有名な男性の姓においては, 無冠詞の状態も現れる。例えば, パリーニ, フォスコロ, マッツィーニ(政治家), ガリバルディ, カヴール, 等」とある。ここで一番疑問に思うことは, 「有名な人」と「非常に有名な人」との区別はどうなっているのか? という点である。また, Palazzi, F.の文法書では il Foscolo (定冠詞), Piazza, E.の文法書では Foscolo (無冠詞)の用例が示されていることも気掛りである。

姓の前は無冠詞を原則とする Palazzi, F.の説と, 定冠詞を付すことを原則とする Piazza, E.の説が真向うから対立している。この他の学者の説を調べてみると, Battaglia, S. & Pernicone, V.(注3), Ceppellini, V.(注4), Migliorini, B.(注5), Panzini, A. & Allulli, R.(注6), Travalza & Allodoli(注7), などが Piazza, E.と似た意見を示している。勿論, その細部においては食違いも若干現れる。さらに, 「姓においては, 定冠詞と無冠詞の両方が現れる」として, どちらが基本的なものであるかについての言及を避けている学者(例えば, Gabrielli, A.(注8), Tinto, E.(注9))も居る。

筆者は以前に, 「イタリア語における冠詞研究」と題して数篇の小論(注10)を発表した。本稿は,

その一連の研究の一つとして、上記の用例のうち最も数多く現れるイタリア人の作家名を中心として、この複雑な事態を解明したいと思う。そして、この種の研究をさらに重ねて後、イタリア語の冠詞の本質へと迫りたい。

§ 2 資料と調査手順

作家名に関する使用頻度の高い資料として、今回の調査では De Sanctis, F. : *Storia della letteratura italiana* 「イタリア文学史」, con introduzione di Luigi Rosso e a cura di Maria Teresa Lanza, Vol. I, II, 1964, Milano (注11) を選ぶことにする。デ・サンクティス(1817～1883)は、ナポリ近郊の町アヴェリーノに生れ、民族解放運動に参加し、ために3年間投獄された。その後、南伊の解放とともに国会議員に選出され幾度も当選、文部大臣の要職をも歴任した人である。彼は、1871年にナポリ大学の比較文学の教授となり、数多くの著作を発表、この「イタリア文学史」は彼の代表作として有名である。

調査の手順としては、多くのイタリア語文法書において定冠詞の付く姓だとされている Boccaccio, G. (1313～1375) と Petrarca, F. (1302～1357) について最初に分析し、その結果と照合して他の作家名に定冠詞が付くか否かを決めることにした。

§ 3 ボッカッチョとペトラルカ——定冠詞の付く作家名

ここで、一般に名詞(ここでは作家名に限る)が無冠詞の状態となる条件(例えば、作家名が列挙されている場合、姓と名とが並記されている場合(注12)、イタリア人以外の外国人の作家名の場合(注13)、作家名が呼格の場合、ser, donなどの称号が付いている場合)と、一般に定冠詞が付く条件(例えば、作家名の直前に形容詞などの修飾語が付いている場合、作家名があだ名(soprannome)の場合(注14))に該当する用例は、あらかじめ除外しておかねばならない。

上記の条件以外のシタクスの環境の下でのボッカッチョとペトラルカがどうなっているかをまとめたのが第1表である。

この表によれば、例えば、「ボッカッチョが主文の主語として現れている場合には、36例とも定冠詞が付いている」、「ペトラルカが前置詞 in の直後に現れる場合には、18例とも定冠詞が付いている」、などのことがわかる。そこで、ボッカッチョもペトラルカも同じ傾向を示しているので、両者ともに「定冠詞の付く作家名」として1つにまとめ、数値を集計し、5%以下の危険率を伴うカイ2乗検定(注15)で有意差の出た条件10種に◎印を付しておいた。

第 1 表

シタクスの 条 件	ボッカッチョ		ペトラルカ		計	
	定冠詞	無冠詞	定冠詞	無冠詞	定冠詞	無冠詞
◎ 主文の主語	36	0	13	0	49	0
◎ 副文の主語	18	0	4	1	22	1
◎ 目的語	7	0	13	0	20	0
◎ essereの補語	5	0	3	0	8	0
◎ 前置詞 a	6	0	9	0	15	0
◎ // con	3	0	4	0	7	0
◎ // da	19	0	6	0	25	0
◎ // dentro	1	0	0	0	1	0
◎ // di	49	0	30	1	79	1
◎ // dopo	0	0	1	0	1	0
◎ // in	13	0	18	0	31	0
◎ // per	1	0	1	0	2	0
◎ come	2	0	4	0	6	0
◎ 同 格	1	0	2	0	3	0

§ 4 その他の作家に関する調査

ボッカッチョ、ペトラルカ以外の作家の姓が、前節で有意差の出た10種のシタクスの条件下で、定冠詞を伴って現れるか否か?について調査したものが、次の第2表である。(なお、シタクスの条件Ⅰは「主文の主語」、Ⅱは「副文の主語」、Ⅲは「目的語」、Ⅳは「essereの補語」、Ⅴは「前置詞aの直後」、Ⅵは「前置詞conの直後」、Ⅶは「前置詞daの直後」、Ⅷは「前置詞diの直後」、Ⅸは「前置詞inの直後」、Ⅹは「comeの直後」をそれぞれ示している。)

この表によれば、例えば、「Alfieri, V. は、主文の主語の場合には17:0で無冠詞の状態で見られる。そして、これら10種の条件下では、合計45:0で無冠詞の状態が優勢である」、などのことがわかる。ここで、定冠詞・無冠詞いずれか一方が圧倒的に優勢である場合(つまり、5%以下の危険率を伴うカイ2乗検定で有意差の認められる場合)は、作家名の左側に◎印を付しておいた。

但し、この表には、次の場合に該当した作家は除外されている。(1)用例の数が5未満で、有意差の出る可能性のない場合。例えば、Alamanni, Luigi (1495-1556); Latini, Brunetto (1226-1270); Leopardi, Giacomo (1798-1837); など。(2)名前(nome)に出身地が付されている場合。例えば、Albertano da Brescia (北伊の町ブレシア出身のアルベルターノ。13世紀頃の作家)、Cino

第 2 表

シタクスの 条件 定冠詞・無冠詞	I		II		III		IV		V		VI		VII		VIII		IX		X		計	
	定	無	定	無	定	無	定	無	定	無	定	無	定	無	定	無	定	無	定	無	定	無
◎ Alfieri	0	17	0	6	0	0	0	1	0	2	0	1	0	1	0	15	0	1	0	1	0	45
◎ Aretino	4	0	6	0	0	0	0	0	2	0	1	0	1	0	5	0	0	0	1	0	20	0
◎ Ariosto	20	0	6	0	5	0	1	0	4	0	0	0	2	0	24	0	5	0	1	0	68	0
Beccaria	2	1	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	1	1	1	0	0	0	0	0	3	4
◎ Bembo	6	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	3	0	1	0	0	0	11	0
◎ Benincasa	0	2	0	1	0	0	0	0	0	5	0	0	0	0	12	0	3	0	0	0	0	23
◎ Berni	6	0	8	0	2	0	0	0	2	0	1	0	2	0	8	0	3	0	0	0	32	0
◎ Boiardo	3	0	5	0	1	0	0	0	2	0	0	0	1	0	5	0	3	0	0	0	20	0
◎ Bruno	0	30	0	6	0	3	0	0	0	2	0	0	0	7	0	17	1	4	0	6	1	75
◎ Campanella	0	15	1	3	0	2	0	0	0	2	0	0	0	2	0	10	0	4	0	1	1	39
◎ Caro	1	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	2	0	1	0	0	0	6	0
◎ Castiglione	1	0	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	4	0	0	0	0	0	8	0
◎ Cavalca	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	6	0	0	0	0	0	6	0
◎ Cavalcanti	0	1	0	0	0	0	0	1	0	1	0	0	0	0	0	3	0	0	0	0	0	6
Cesarotti	4	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	5	1
◎ Chiabrera	6	0	1	0	0	0	1	0	1	0	0	0	1	0	1	0	1	0	0	0	12	0
◎ Della Casa	2	0	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	5	0	0	0	0	0	9	0
Ficino	0	0	0	0	1	0	1	0	1	0	0	0	0	0	2	1	0	1	0	5	2	
◎ Folengo	1	0	1	0	0	0	0	0	1	0	1	0	0	0	3	0	1	0	0	0	8	0
◎ Foscolo	0	13	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	5	0	0	0	0	0	0	19
Giannone	0	2	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	1	0	0	1	4	
Goldoni	2	15	0	1	0	2	0	0	0	3	0	0	0	0	5	4	0	0	0	0	7	25
Gozzi	0	2	0	0	0	0	0	0	2	0	0	0	0	0	2	2	0	0	0	0	4	4
Gravina	1	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	2	1	0	0	0	0	5	2
◎ Guarini	5	0	4	0	2	0	0	0	3	0	0	0	1	0	1	1	4	0	0	0	20	1
◎ Guicciardini	1	0	2	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	3	0	1	0	1	0	9	0
Guinicelli	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	1	0	1	2	0	0	0	0	2	3
Machiavelli	20	30	7	9	1	7	1	1	2	1	2	0	4	0	35	19	6	0	2	1	80	68
◎ Manzoni	0	5	0	3	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	8
◎ Marino	5	1	3	0	1	0	0	0	0	0	1	0	0	0	6	1	4	0	1	0	21	2
◎ Metastasio	1	8	0	2	0	1	0	2	1	4	0	0	0	1	2	7	0	1	2	3	6	29
Monti	0	2	2	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	3	0	0	0	0	0	2	6
Mussato	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	1	1	0	1	2	0	0	3	3
◎ Parini	0	4	0	1	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	3	0	1	0	1	1	10	
◎ Passavanti	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	6	0	0	0	0	0	0	6	0
◎ Poliziano	8	0	4	0	1	0	2	0	5	0	0	0	3	0	11	0	12	0	1	0	47	0
Pomponazzi	0	1	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	3	0	0	0	0	0	4	1
◎ Pontano	4	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	2	0	0	0	0	8	0
◎ Pulci	5	0	1	0	2	0	1	0	3	0	0	0	0	0	6	0	1	0	0	0	19	0
◎ Sacchetti	3	0	1	0	2	0	1	0	0	0	0	0	2	0	4	0	1	0	0	0	14	0
◎ Sanna zaro	1	0	1	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	3	0	0	0	1	0	7	0	
Sarpi	1	1	3	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	0	0	0	6	1
◎ Tasso	19	0	10	0	3	0	1	0	2	0	1	0	10	0	30	1	12	0	2	0	90	1
◎ Telesio	0	2	0	1	0	1	0	1	0	1	0	0	0	2	0	9	0	0	0	0	0	17
◎ Trissino	4	0	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	7	0
◎ Vico	0	17	0	6	0	0	0	0	0	2	0	1	0	2	0	11	0	2	0	0	0	41

da Pistoia (ピストイア出身のチーノ。1265 頃～1336 頃), Ciullo d'Alcamo (シチリアの町アルカモ出身のチュルロ。13 世紀中葉の作家), Guittone d'Arezzo (トスカナの町アレツォ出身のグイットーネ。1225 頃～1293 頃), Iacopone da Todi (ウンブリアの町トーディ出身のヤコポーネ。1230 頃～1306)。(これらの場合、nome は通常無冠詞で現れるので、当然無冠詞となる。)

また、これらの作家名の中には、Bruno, G., Campanella, T., Vico, G. などの、いわゆる哲学者や、Machiavelli, N. のような政治家も含まれているが、これは、デ・サンクティスが彼の「イタリア文学史」において哲学者・歴史家などの著作をもいわゆる文学と同等の扱いをしているのに従ったものである。

§ 5 分析と結果

前節の調査によって、定冠詞の付く作家名と無冠詞で現れる作家名とが明らかになった。その一覧表が第 3 表である。

この表からわかるように、24:11 で定冠詞の付く作家名の方が断然多い。従って、本稿 § 1 において Piazza, E. 以下沢山の学者が「姓には定冠詞を付すことを原則とする」としているのも肯ける。

第 3 表

定冠詞の付く作家名	
Aretino, P. (1492～1556)	Guarini, B. (1425～1503)
Ariosto, L. (1474～1533)	Guicciardini, F. (1483～1540)
Bembo, P. (1470～1547)	Marino, G. B. (1569～1625)
Berni, F. (1497～1535)	Passavanti, J. (1302～1357)
Boccaccio, G. (1313～1375)	Petrarca, F. (1304～1374)
Boiardo, M. M. (1441～1494)	Poliziano, A. A. (1454～1494)
Caro, A. (1507～1566)	Pontano, G. (1426～1503)
Castiglione, B. (1478～1529)	Pulci, L. (1432～1484)
Cavalca, D. (1270～1342)	Sacchetti, F. (1330～1400)
Chiabrera, G. (1552～1638)	Sannazaro, J. (1456～1530)
Della Casa, G. (1503～1556)	Tasso, T. (1544～1595)
Folengo, T. (1491～1544)	Trissino, G. G. (1478～1550)
無冠詞の作家名	
Alfieri, V. (1749～1803)	Manzoni, A. (1785～1873)
Benincasa, C. (1347～1380)	Metastasio, P. T. (1698～1782)
Bruno, G. (1548～1600)	Parini, G. (1729～1799)
Campanella, T. (1568～1639)	Telesio, B. (1509～1558)
Cavalcanti, G. (1255～1300)	Vico, G. (1668～1744)
Foscolo, U. (1778～1827)	

次に、「有名な作家には定冠詞が付く」という説であるが、Manzoni, A.のような大物が無冠詞の仲間に入っている点を考えても、納得がいかない。念のため、Renda, U. & Operti, P.: *Dizionario storico della letteratura italiana* 「イタリア文学史辞典」、1959, Torino を利用して、「上記35名の作家それぞれに関して、何行に亘って説明が加えられているか？」を調べて、その行数の長さを「有名度」に置き換え、定冠詞が付くか否かの判断の基準となっているかどうか調べてみた。結果は否であった。

次に、上記35名の作家の出身地を調べ、地方別に並べてみたが、その差も現れなかった。また、姓の語尾(-o, -a, -e, -i)によって用法の差があるのではあるまいかと思い、分類してみたが、その差も関係がなかった。

最後に、35名の作家の存命期間を調べ、グラフにしてみたのが第4表である。(参考のために、デ・サンクティスの存命期間を斜線で示しておいた。また、(i)の線は、デ・サンクティスが「イタリア文学史」を執筆した年(1871年)を表わしている。)

第 4 表

無冠詞の作家名																Manzoni, A.	デ ・ サ ン ク チ ェ ス の 存 命 期 間
																Foscolo, U.	
定冠詞の付く作家名																Alfieri, V.	デ ・ サ ン ク チ ェ ス の 存 命 期 間
																Parini, G.	
															Campanella, T.	デ ・ サ ン ク チ ェ ス の 存 命 期 間	
															Bruno, G.		
															Metastasio, P. T.	デ ・ サ ン ク チ ェ ス の 存 命 期 間	
															Vico, G.		
															Caro, A.	デ ・ サ ン ク チ ェ ス の 存 命 期 間	
															Della Casa, G.		
															Berni, F.	デ ・ サ ン ク チ ェ ス の 存 命 期 間	
															Aretino, P.		
															Folengo, T.	デ ・ サ ン ク チ ェ ス の 存 命 期 間	
															Guicciardini, F.		
															Trissino, G. G.	デ ・ サ ン ク チ ェ ス の 存 命 期 間	
															Castiglione, B.		
															Ariosto, L.	デ ・ サ ン ク チ ェ ス の 存 命 期 間	
															Bembo, P.		
															Sannazaro, J.	デ ・ サ ン ク チ ェ ス の 存 命 期 間	
															Poliziano, A. A.		
															Sacchetti, F.	デ ・ サ ン ク チ ェ ス の 存 命 期 間	
															Boiardo, M. M.		
															Boccaccio, G.	デ ・ サ ン ク チ ェ ス の 存 命 期 間	
															Pulci, L.		
															Marino, G. B.	デ ・ サ ン ク チ ェ ス の 存 命 期 間	
															Petrarca, F.		
															Chiabrera, G.	デ ・ サ ン ク チ ェ ス の 存 命 期 間	
															Pontano, G.		
															Chiabrera, G.	デ ・ サ ン ク チ ェ ス の 存 命 期 間	
															Passavanti, J.		
															Tasso, T.	デ ・ サ ン ク チ ェ ス の 存 命 期 間	
															Guarini, B.		
															Cavalca, D.	デ ・ サ ン ク チ ェ ス の 存 命 期 間	
															Tasso, T.		
															(i) 1871	デ ・ サ ン ク チ ェ ス の 存 命 期 間	
															1900		

この表を見ると、1650年頃が大きな境目になっているように思われる。即ち、1650年以前では圧倒的に定冠詞の付く作家名が多く、それ以後は無冠詞の作家名が続いている。つまり、執筆完了年（1871年）からさかのぼること221年、約200年前までの作家は無冠詞、それ以前の古い作家には定冠詞を付ける傾向がはっきり現れている。

§ 6 結 語

§ 1で触れたように、多くの学者は、「有名な人」「非常に有名な人」という表現を用いている。しかし、何をもって有名度を測るべきかについては、異論も多かるう。そこで、筆者は、上述の結論を踏まえて、「古い人」「新しい人」の対立を1つの客観的尺度として強調したい。「古い人」には尊敬をこめて定冠詞を付し、未だ評価の固定していない「新しい人」は無冠詞にすると考えるのである。「古い人」「新しい人」の境界は、デ・サンクティスを例にとれば、彼の「イタリア文学史」執筆の時点より約200年前（注16）となっている。尤も、今回は、作家名にのみの絞りを、デ・サンクティスのみの調査であった。そして、例外も多少存在する。例えば、第4表において、Cavalcanti, G., Benincasa, C., Telesio, B., Bruno, G., Campanella, T. には何故定冠詞が付かないのであろうか？この点は、さらに追究の余地があると思われる。今後、他の時代の人の著作（例えば、Sapegno, N. の「イタリア文学史」など）を資料として、さらに調査を進めて行きたい。

本稿に直接関連する先行論文として、Hall, R. A. Jr.の“Definite Article + Family Name in Italian”（*Language*, vol. 17, 1941, pp. 33～39）を挙げておかねばなるまい。この中で、彼は、『il Machiavelli』のような冠詞の用法は、古代イタリア語の「複数の定冠詞+姓（例えば、i Pulci「プルチ家の人々」など）」の用法に起源を有し、ルネッサンス期に定着した。単数の姓が無冠詞でしばしば用いられるようになったのは、19世紀になってからのことである。これは、「姓」が会話体では「名（nome）」と同等の扱いをされるようになったためである。そして、現在では、姓に定冠詞を付すと、形式的でペダンティックな感じさえするようになった。この用法もやがては完全に消失するであろう。』と述べている。但し、彼の論文では、19世紀の錯綜した実態については詳述しておらず、その点やや物足りなさを感じさせるが、歴史的な展望を示した点で高く評価できると思う。

（注 1） Palazzi, F.: *Novissima grammatica italiana*, 1962, Milano, p. 107

（注 2） Piazza, E.: *Grammatica italiana*, 1933, Livorno, vol. II, p. 14

（注 3） Battaglia, S. & Pernicone, V.: *La grammatica italiana*, 1957, Torino, p. 139

（注 4） Ceppellini, V.: *Dizionario grammaticale per il buon uso della lingua italiana*, 1962, Novara, p. 42

（注 5） Migliorini, B.: *La lingua nazionale*, 1963, Firenze, p. 143

（注 6） Panzini, A. & Allulli, R.: *Nostra favella, grammatica della lingua italiana*,

.1962, Verona, p. 92

- (注 7) Trabalza & Allodoli: *La grammatica degl'italiani*, 1935, Firenze, p. 89
- (注 8) Gabrielli, A.: *Dizionario linguistico moderno*, 1961, Milano, p. 57
- (注 9) Tinto, E.: *Grammatica scienza esatta*, 1959, Roma, p. 16
- (注 10) 拙稿「イタリア語における冠詞研究(1) — 比喻表現を中心として —」(広島大学文学部紀要, 第 25 卷 2 号, 1965); 「同上(2) — 島の名前を中心として —」(広島大学文学部紀要, 第 26 卷 2 号, 1966); 「同上(3) — 方角をあらわす名詞を中心として —」(イタリア学会誌, 第 15 号, 1966); 「同上(4) — 格言を中心として —」(広島大学文学部紀要, 第 27 卷 2 号, 1967); 「Studio sull'articolo determinativo in italiano con particolare riferimento ai nomi d'isola」*Annuario XI*, pp. 77~87, Istituto Giapponese di Cultura in Roma, Roma 1973 / 1974 (上記(2)の論文を修正し, 伊語でまとめたもの)
- (注 11) この書物の邦訳としては, 池田廉・米山喜晟共訳「デ・サンクティス, イタリア文学史 I, 中世篇」1970, 現代思潮社; 在里寛司・藤沢道郎共訳「デ・サンクティス, イタリア文学史 II, ルネサンス篇」1973, 現代思潮社がある。
- (注 12) Giovanni Boccaccio, Francesco Petrarca のように, 姓名が並記される場合は例外なく無冠詞。
- (注 13) 特に, 古代ギリシア・ローマの作家名は常に無冠詞。例えば, Omero 「ホメーロス」, Plinio 「プリニウス」, Cicerone 「キケロ」, など。
- (注 14) 例えば, Grazzini, A. F. (1503~1584) は, そのあだ名を Lasca と言い, これは常に il Lasca として現れる。
- (注 15) この用法については, 上掲拙稿「イタリア語における冠詞研究(1)」pp. 284~285 & p. 296 を参照。
- (注 16) 坂本鉄男著「最新イタリア語文法」昭和41年, イタリア書房, p. 34 によれば, 「19世紀以前の(ローマ時代は除く)有名人の姓には定冠詞を付けるのが普通」とある。ここでは, デ・サンクティスの場合とは境界時期を異にするが, 時代を区切っている点では筆者と同じ方向の説が示されている。